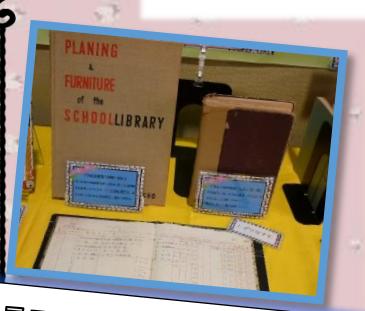
2017.11.10 発行（No.33）
香川短期大学附属図書館

# 図書館通信

## 図書館で見つけた色々な50

香川短期大学は、平成 29 年（2017 年）4 月に創立 50 周年を迎えました。



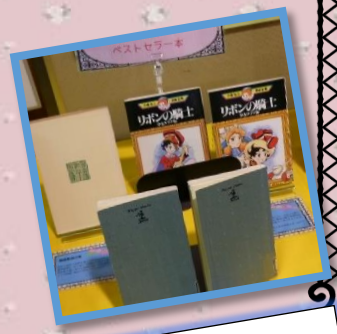

附属図書館の蔵書は約 9 万冊
その第 1 号となった登録番号
1 番の図書を当時の台帳のレプリカと共に展示

創立 50 周年を記念して、附属図書館で保管している 50 年前に関連する資料を展示しています。当時の学術、生活、文化の様子を垣間見ることができます。また、現在の利用者の方々に、今そばにある本と 50 のオブジェ（館員手作り）を持って記念撮影を、と呼びかけたところ、学長先生をはじめ、学生、教職員、見学に訪れた高校生など、沢山の方々にご参加いただきました。

50 年前発行の図書

現在の図書館利用者に聞きました
今、あなたのそばにある本は何ですか？
今、自分のそばにある本と記念撮影

50 年前発行の雑誌




50 年前のベストセラー

## 寄贈図書

トゥルムホッホメディテック株式会社
代表取締役 会長 兼 社長
株式会社ストラテジック・ドミナンス
代表取締役社長
白上　篤　様

白上様より、400 冊を超える図書をご寄贈いただきました。一般書から専門書まで幅広い分野の図書です。コーナーを設けて配架していますので、どうぞご活用ください。

## ～寄稿文～

子ども学科第Ⅰ部　准教授
林 美代　先生

子どものころから図書館をよく利用していたが、その利用の仕方は変わってきたように思う。子どものころは、図書館は読みたい本を探して借りるところであった。時間があればそこで読むし、時間がないあるいはもう一度読みたいと思った時はカウンターで手続きをして家で読む。その繰り返しではあったが、様々なジャンルの本を借りて読むのが楽しかった。

学生時代になると、専門書を中心にたくさん本を借りた。しかしそれ以上に利用したものがあった。「レファレンスサービス」である。子どもの頃はその機能について知らなかったが、調べ物のお手伝いをしてくれる機能なのでいざ利用してみると非常にありがたかった。そこで、私が利用したレファレンスサービスを紹介したい。

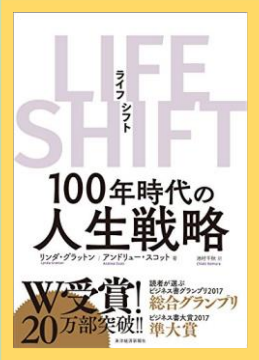
まず利用したのが「蔵書検索」である。読みたい本が図書館にあるのかどうかを検索してくれる機能であるから、広い館内を隅々まで歩き回る必要がない。館内にあれば、登録番号を聞き貸出手続きをする、あるいは貸出中なら予約をする。もちろん、図書館が所有していない場合もある。その場合は近くの図書館にあるかどうか、さらには全国の図書館のどこにあるかまで検索してくれる。自分で借りに行ける範囲の図書館であれば出かけるし、遠方ならば「現物貸借」あるいはコピーの依頼をして待つ。郵送料はかかったが、わざわざ出かけなくてもよかったので、この方法でたくさんの本や雑誌を手にした。

それから「書誌的事項調査」もよくお願いした。これは資料が持つ情報(書名、著者名、出版社、出版年、ページなど)を検索してくれる機能である。専門雑誌などを読む機会が増えてくると、どの読みたい論文がどの刊行物に載っているのかを調べなければならない。雑誌となると、毎年発行されるものから月刊、週刊と様々である。その膨大な刊行物の中から見つけ出すのは非常に困難である。そこで「〇〇という論文はどの雑誌の何ページに記載されていますか」と尋ね、検索してもらうのである。もちろん返答の際は蔵書検索もしてくれているので、随分時間短縮になった。

さらに「文献案内」も利用したことがある。レポートを書く際にどんな本や雑誌を読めばよいのかわからないことがある。その時には「〇〇に関する本はありますか」と尋ねればよい。キーワードをもとに検索し、適切な情報を提供してくれる。何冊か紹介してくれるので、その中から目次を見て貸出手続きをする。初めは漠然とした内容を尋ねてもよいのか不安だったが、丁寧に答えてくれてうれしかったのを覚えている。

今では、これらのことはインターネットを通じていつでもどこからでも自分でできるようになった。しかし、こういう機能が図書館にあるということを知らなければ、未だに図書館は本を借りるだけのところになっていたかもしれない。学生の皆さんは図書館をどのように利用しているのだろうか。本を借りるだけの場になっていてはもったいない。専門的な学びを深めるためにも、レファレンスサービスを是非利用していただきたい。

## ～図書紹介～
入試広報部
楠見寿一郎　先生




『ライフ・シフト』
リンダ・グラットン、
アンドリュー・スコット著
東洋経済新報社
請求記号　159/GR

100 歳以上の人・・・センテナアリアン

日本はすでに６万 1000 人以上、国連の推計によれば 2050 年までに日本のセンテナリアンは 100 万人を突破する見込みである。2007 年に日本で生まれた子どもの半分は 107 年以上生きることが予想される。長寿･･･今日の世代が享受出来る大きな恩恵の一つである。平均して私たちは親の世代よりも長く、祖父母の世代に比べればさらに長く生きる。私たちの子どもや孫の世代は、もっと長く生きるようになる。今、進んでいる長寿化は私たちすべてに少なからず影響を及ぼす。平均寿命は大幅に伸びることに間違いはない。いま先進国で生まれる子どもは 50%を上回る確率で 107 歳以上生きるのである。一世紀以上前に生まれた子どもが 105 歳まで生きる確率は 1%に満たなかった。こうした変化はゆっくりではあるが着実に進んできた。過去 200 年間、平均寿命は 10 年に 2 年以上のペースで延びてきた。今の 20 歳の人は 100 歳以上、40 歳の人は 95 歳以上、60 歳の人は 90 歳以上生きる確率が半分以上である。過去 200 年のほとんどの期間、平均寿命は右肩上がりで延びてきた。1840 年以降、データがあるなかで最も長寿の国の平均寿命は 1 年に平均３ヶ月のペースで上昇している。10 年ごとに 2～3 年ずつ寿命が延びている計算である。端的に言えば、若い人ほど長く生きる可能性が高い。10 年ごとに平均 2～3 年のペースで平均寿命が上昇していることを考えると、2007 年生まれの 50%が到達する年齢が 104 歳、10 年前の 1997 年生まれの人の場合、その年齢は 101～102 歳、さらに 10 年前の 1987 年生まれの人は 98～100 歳だ。1977 年生まれは 95～98 歳、1967 年生まれは 92～96 歳、1957 年生まれは 89～94 歳となる。人生 70 年なら一生涯は 61 万 3200 時間だが、人生が 100 年なら一生涯は 87 万 6000 時間となる。人類は、そして中でも日本に住む私たちは、今までに誰も経験したことのない長い人生を生きようとしているのだ。

本書『ライフ・シフト』は、ベストセラーとなった『ワーク・シフト』（2013 年ビジネス書大賞受賞）の著者であり、ロンドン・ビジネススクールの教授であるリンダ・グラットン氏（心理学博士）が、同校の経済学教授であるアンドリュー・スコット氏と共に、豊富なデータを基にこれからの超長寿社会、100 年ライフをどう生きるべきかを考察したものだ。

これまで多くの人々は「教育⇒仕事⇒引退」という 3 ステージの人生を歩んできた。しかし寿命が伸びれば、70，80 代まで働くことが当たり前となっていく。また、仕事のステージの長期化に伴い、ステージの移行を数多く経験する「マルチステージ」の人生に突入するだろう。人生の選択肢が多様化する

次ページに続く→

ため、自分のアイデンティティを主体的に築きながら、人生をどのように設計するかが問われる。多くの人が、人生 80 年からその先、もう 20～30 年を（健康に）生きる時代がくるとしたら、どうだろうか。3 ステージモデルから脱却し、マルチステージの新しい生き方、働き方を考えるべきだと説いている。3 ステージに沿って漠然と「終活」を考えていた人も、人生設計について考えなおす必要があるかもしれない。また、金銭的な有形の資産と、家族や友人関係、知識、健康などの「見えない資産」とのバランスを取ることが重要になる。「見えない資産」は生産性資産、活力資産、変身資産の三つに大別され、それらに投資を続け、自らを再創造することが実り多い 100 年ライフには欠かせない。

近年、日本でも「働き方改革」が政府の経済政策の大きなテーマとなっている。企業サイドでも、裁量労働制やテレワーク・在宅勤務といった柔軟な働き方の検討や導入が進められている。ビジネスパーソンにとっての身近な話題は、企業による副業の解禁だろう。これからのビジネスパーソンは複数の職業人生を同時に生きることになるのかもしれないし、副業に経済的メリットがあるのなら取り組んでみたいと考える方もいることだろう。

フェイスブックなどのソーシャルネットワークの発達により、人々は実際に会わずとも瞬時にコミュニケーションをとれるようになっている。現在では当たり前となったこうした環境に慣れると、それらがなかった 20 年前の時代はもはや思い出すこともできない。この間のテクノロジーの変化の大きさに比べれば、人々の働き方の変化はやはり緩慢だったといえるだろう。ロボットや AI に、高スキル労働者が代替される一方で、新しい雇用が生まれ、経済成長を牽引するという明るい見方もある。このような変化の中で重要なことは、人々が精力的かつ創造的に生きるための新しいシナリオを考えていくことである。『ライフ・シフト』でこれまでの成長至上主義から脱却し、自分らしい人生の道筋を描いてみてはいかがでしょうか。

著者のリンダ・グラットンさんは安倍首相が意欲を示す、「人づくり革命」有識者会議「人生 100 年時代構想会議」（2017/9/11～）に有識者として招聘されました。

## 編集後記

企画展示「図書館で見つけた色々な 50」で印象に残った『日本十進分類法（NDC）第７版』。50 年前、附属図書館蔵書第２号として登録された本書は、図書分類作業に欠かせないものであるが、補修の跡があり使い込まれた様子に、先輩図書館員の熱心に取組む姿が思い浮かぶ。現在使用しているのは第 10 版、日々の利用者サービスを大切にし、それを積み重ねることで次の時代によきものを残せるよう精進せねば！と改めてバトンを渡された思いとなった。

図書をご寄贈くださった白上様、ご寄稿くださった林先生、楠見先生、企画展示イベントにご参加くださった皆様、ありがとうございました。（F）